

第 12・13 回ビオトープ顕彰受賞作品の紹介

◇審査報告・講評 『ビオトープフォーラム in 横浜』(2021 年 10 月 22 日)にて

昨年は、新型コロナ感染症拡大の中で第 12 回ビオトープ顕彰の審査及び表彰は、今年に繰り越され第 13 回と合わせて 4 月 8 日に顕彰選考委員会を開催し厳正に審査いたしました。

例年通り全国各ブロック委員会で、多くのビオトープ事例の中から選抜された 6 件がエントリーされました。

企業が取り組むビオトープ 4 件、介護保険施設の手になるビオトープ 1 件、有志で創るビオトープ 1 件となり、いずれ劣らずそれぞれの地域性と理念に添った素晴らしいビオトープでありました。

◎「ビオトープ大賞」に選定された、滋賀県長浜市の「ヤンマーミュージアム・屋根の上のビオトープ」は、2012 年の創業 100 年を記念して、創業者の精神を受け継いだ「自然との共生」をテーマに、琵琶湖の自然・地域性ある生態系の創造で、来場する多くの子供たちが SDGs・生物多様性を学ぶ場として、体験型ミュージアムの大切な位置を占めています。外来種生物を排除し継続性のある維持管理が図られており高く評価されました。

◎「審査委員長賞」に選定された、福島県「いきがい村里山ビオトープ」は、医療法人社団正風会の介護老人保健施設「いきがい村」石井理事長の強い理念と見識で、手つかずの雑木林を多彩な生物空間・里山の原風景として創造してきたビオトープ。施設利用者それぞれに見合った憩いの場、リハビリの場として活用され効果を上げています。特にこの立地は、親潮と黒潮の交わる海域に接していて、南限植生と北限植生の混在する貴重で特異なビオトープとしても高く評価されました。

◎「協会会長特別賞」に選定された、愛知県「ECO35 (エコサンゴ)」2006 年より地域の熱田神宮の森をモデルに、企業の森づくり活動が開始され、2008 年創業 80 年を記念して、その基本理念として「人づくり・ものづくり・環境づくり」を掲げ、「都心の中に自然豊かな里山風景を取り戻す」をコンセプトとして、県内の希少種・絶滅危惧種などの生育環境を作り保全するビオトープであると共に、田植えや刈取り収穫など都会の小学生を対象に体験的な環境教育の場を提供していて、高く評価されました。

◎「協会会長特別賞」に選定された兵庫県「タガメビオトープ」は、1999 年「林田にタガメの里を作る会」が結成されて、市川代表を中心に姫路市の協力を得ながら 20 年以上にわたり、山間の放棄地に「タガメ」を指標生物として、多様な水生生物の棲息できるビオトープとして管理を続けている。また環境教育実践の場としても活用されています。滋賀・京都・兵庫にも支援者は広がり、生態系を調査し守り続けている事が高く評価されました。

◎「環境活動推進賞」に選定された、滋賀県「湯屋のヘーベルビオトープ」は、旭化成住工株式会社の生物多様性保全活動のシンボルとして、2017 年に整備され、翌年のビオトープ顕彰で「CSR 特別賞」を授与されています。この受賞を機に「溜池文化・森と水をつなぐ暮らしの再発見プロジェクト」へと発展し、希少種「ヨツボシトンボ」を指標種として「湯屋地域の生態系保全推進」の為に、維持管理に務めて今では 60 種以上の多様な生き物が棲めるビオトープとなっている事が高く評価されました。

◎「維持活動功績賞」に選定された、新潟県「エアマン・エコロジカルパーク 100 年の森」は、北越工業株式会社の本社工場建設の 1979 年から、水田埋立地の荒涼としたエリアに「森に囲まれた工場」を作るというコンセプトとして「ゼロからのふるさとの森づくり計画」がスタート、2013 年からは、100 年の森づくりへとエコアップして近自然な森が形成され、多様な生き物の生息地となっています。生物相調査も行われていて、そのデータに基づいた森づくりを継続して居り高く評価されました。

以上、今回エントリーされた優秀なビオトープ 6 件のご紹介をもって講評にかえさせて頂きました。

(協会代表顧問 鈴木邦雄顕彰選考委員長、副会長 野澤日出夫顕彰事務局長)

◇ビオトープ大賞

[下記各顕彰書類より転記]

名 称	ヤンマーミュージアム
受賞者	ヤンマーグローバルエキスパート株式会社、株式会社日本設計、清水建設株式会社、近江花勝造園株式会社、株式会社ラゴ

【テーマ・概要】

ヤンマーミュージアムの「屋根の上のビオトープ」は、『自然との共生』がテーマです。ヤンマーの環境に対する企業理念を実現するとともに、子どもたちへの環境教育プログラムを実施する場所としています。地域産植物により琵琶湖の水辺風景を再現したビオトープでは、近年見ることが少なくなったメダカやドジョウなど、地域の生物が生息しています。またトンボなどの昆虫や野鳥が周囲の自然から訪れ、それらが運ぶ種子や卵が新しい生命としてビオトープで育ち、地域らしい『豊かな自然環境』をつくっています。ミュージアムに来場される方に開放するとともに、定期的にワークショップを開催して子どもたちの学習フィールドとして提供しています。

【整備方針と管理手法】

「屋根の上のビオトープ」は、琵琶湖周辺のトンボ類などを中心とした在来生物が生息する、湖北地域の自然を再現しています。そのために、琵琶湖博物館学芸員による指導や地域の動植物の専門家へのヒヤリングを通して、生物の育成を適切に計画しています。ビオトープを 2 階テラスに施工することで外来生物の侵入を極力低減するとともに、来場者が多様な動植物とふれあえるように池や湿地、草地など様々な環境を配置しています。池では在来種の水草を導入して夏場の水温上昇を防ぎ、生物の隠れ場や産卵場所をつくっています。また、生物の専門家による定期診断を行うことで、通常の管理作業に加え外来植物の選択的除草など順応的管理も行っています。



◇審査委員長賞

名 称	いきがい村里山ピオトープ
受賞者	医療法人社団正風会 介護老人保健施設いきがい村、農業生産法人有限会社いわき苗木センター

【テーマ・概要】

高齢社会の視点からのピオトープ活動
 2001年に海を見下ろす岬の上に「老いてからの時間こそが重要であると表現する意図で老人保健施設「いきがい村」を建設。敷地内山林は、長年に渡り放置され笹藪の繁茂や雑木の伸長により里山の生物相は多様性が失われていました。この里山再生事業は、かつての湿原や多様な植生に恵まれた豊かで特徴的な立地条件持つ里山の原風景を取り戻し、生き物の生息域を回復し、施設利用者の憩いの場、リハビリの場、生きがいの場として利活用するため整備しました。

【整備方針と管理手法】

整備にあたっては笹竹・不要木を伐採し枝葉は破碎処理後、遊歩道のマルチング材とし、重機の使用は極力避け人力作業で行うものとしました。太い丸太等は輪切りにして飛石状に敷設しました。樹木の伐採においては、地表に木漏れ日が落ちる程度の間伐部と全伐部とを組み合わせたり、部分的な下刈りなど行き様々な空間を創出することなど多様性を持たせました。また、自然の中に最小限の遊歩道や湿原への展望台、畑なども整備し施設利用者の利便性も考慮し整備しました。



◇協会会長特別賞

名 称	ECO35（エコサンゴ）
受賞者	株式会社三五、エスペックミック株式会社

【テーマ・概要】

三五の創業と同時に新設された名古屋工場が閉鎖されたのは2003年でした。条例の改正で使用していた洗浄剤が土壌汚染物質に指定されたからでした。工場を解体して地域の無機質なコンクリートの空間から緑環境を再現した里山風景をコンセプトにしました。創業80周年を迎えた2008年に“人づくり・ものづくり・環境づくり”を柱にした基本理念を策定しました。環境づくりの森づくり活動は2006年11月よりスタートし、そして2008年8月よりピオトープの整備を進めました。

- ①森の樹種は近くにある熱田神宮の森をモデルとする。
- ②森、草地、池、小川、田んぼなどを再現して生き物が住める環境をつくる。
- ③愛知県内で採取したメダカ、モロコ、ドジョウ、およびタニシやカワニナを入れてハイケホタルを育てる。

また愛知県の絶滅危惧種に指定されているデンジソウを保全する。地域との連携では、都会の小中学生へ田んぼでの田植えや稲刈りの体験 ESD を行い収穫した米を家庭科授業で食する機会やピオトープでの環境教育をはかっています。

また愛知県生態系ネットワーク協議会での大学・行政・他企業との交流をしています。

【整備方針と管理手法】

- ①ピオトープ管理
 - ・枝の公道隣地へのはみ出し切り、外来種の草の駆除
 - ・ザリガニの全域駆除
- ②米作りのスケジュール管理
- ③日進市にある「折戸川にホタルを飛ばそう会」の指導を受けてハイケホタルの飼育を行っています。



◇協会会長特別賞

名 称	タガメピオトープ
受賞者	林田にタガメの里をつくる会

【テーマ・概要】

1990年代兵庫県西部にはタガメの生息地が残っていましたが、中央部では姿を消し、姫路市内からも姿を消しつつありました。1999年に姫路市西部の谷間の放棄田を借り受け、そこをピオトープとして整備し、タガメの里をつくることを目指しました。2003年に姫路市が谷全体を借り受け伊勢自然の里をつくったため、タガメピオトープは伊勢自然の里の中に取り込まれましたが、ピオトープの管理運営は林田にタガメの里をつくる会が継続して行っています。

【整備方針と管理手法】

放棄田に周年湛水したピオトープは、放っておけば泥がたまって次第に浅くなります。ミソソバ等が茂れば陸地化が進むだけでなく、調査も困難になります。岸辺や池内の草刈りや泥揚げは随時行わなければなりません。4月～10月会員が月に1、2回集まり、これらの作業を行うとともに、戻ってきたタガメや産み付けられた卵塊数、その年に羽化した新成虫の数等を、タガメの背中に背番号をつけることによって調査しています。

※タガメピオトープHP <http://tagamenosato.com/>



◇環境活動推進賞

名 称	湯屋のハーベルピオトープ
受賞者	旭化成住工株式会社、株式会社ラーゴ
<p>【テーマ・概要】 本件ピオトープは、滋賀工場の生物多様性保全活動のシンボルとして、また、全ての従業員や地域、取引先、学校、行政機関などの連携の中心となる存在として、2017年6月に整備を行いました。2018年、第10回ピオトープ顕彰でCSR特別賞を受賞しました。</p> <p>この受賞を機に「森と水をつなぐ東近江の暮らし再発見プロジェクト」を立ち上げ、ピオトープを核とした「溜池文化」再生の取り組みの中で、希少種ヨツボシトンボを指標種とし地域の生物多様性の保全を推進するため、モニタリング調査結果を反映したピオトープ池の植栽改善や、コンテナピオトープの活用・改善などを行った結果、ヨツボシトンボの誘引、定着に成功するとともに、60種を超える生き物が生息するようになり、「溜池文化」の再生に大きく前進しました。</p>	
<p>【整備方針と管理手法】 2017年、ピオトープ池の植栽は地域産のヨシやミクリ、アゼスゲなどを適度に配置し、やや広めの開放水面にしていたため、このような環境を好む大型のギンヤンマが多数飛来、そのヤゴが他種のトンボの小型のヤゴを捕食するという状況が見られました。</p> <p>そこで、ヨツボシトンボが好むヨシの植栽密度を増やし、開放水面を減らすことでギンヤンマの飛来数の抑制を図った結果、ギンヤンマの飛来数は減少し、ヨツボシトンボの飛来を確認。</p> <p>またチョウトンボやアキアカネも飛来、産卵するようになり、トンボの多様性が向上しました。</p> <p>ピオトープ内の草刈りは、3回/年、定期的に外部委託して行っています。この際、専門家によるモニタリング調査を反映し、情報共有するための維持管理会議を行い、トンボの繁殖期には水辺の植物を残すなど順応的に管理しています。</p>	
	

◇維持活動功績賞

名 称	エアマン・エコロジカルパーク100年の森づくり
受賞者	北越工業株式会社、株式会社グリーンシグマ
<p>【テーマ・概要】 1979年から始まった本社工場建設に伴い約24haの草木が全く生えていない水田埋立地に、森に囲まれた工場をコンセプトとして「ゼロからのふるさとの森づくり計画」がスタートしました。30年間の緑化の取組が認められ、2012年緑化優良工場経済産業大臣賞を受賞し、翌2013年より「エアマン・エコロジカルパーク100年の森づくり計画」がスタートしております。工場の緑地は、外周を囲む防風林の松林の内側に落葉広葉樹林を配し、その中にコンクリートを使わない人工のせせらぎと池があるふるさとの森を形成しています。また調整池も素掘りとし、現在は水鳥の楽園になっています。春には地域の保育園児が訪れ、ふるさとの森の散策を楽しんでいます。</p>	
<p>【整備方針と管理手法】 この森は、最初から目的とする高木樹種を植えるのではなく、この地域に生育可能な自然林を構成する樹種の小さな苗木をたくさん植えて、その苗木が競争をしながらその土地条件と気象条件に適合した樹種が、最終的に森を構成していくことを目指しました。約40年を経過した現在では、森を形成する樹種も変化し、ふるさとの森の池、調整池の水辺を中心に森に生息する生き物たちも多様化してきております。2017年には、本社工場の森に生息する樹木、植物、両生類・爬虫類・哺乳類、鳥類、昆虫類について調査を実施し、これらの調査結果により生物多様性への配慮をしながら森づくりを継続しています。</p>	
	